帰って来た__対人援助学の縦横無尽(3)

2025 年度前半期の文化心理学ネットワーク、ちょっとだけその他

立命館大学総合心理学部　サトウタツヤ

学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長

前口上

昨年、一昨年と『対人援助学マガジン』に寄稿した。コロナ後の文化心理学ネットワークの再始動の様子を記録したものである。年に 1 回の寄稿だとボリュームが大きくなりすぎるので、2025 年度はその都度記録して、年に 2 回寄稿してみることにした。この 4 月には学校法人立命館理事・副総長／立命館大学副学長という職に任じられたこともあり、そうした関係の活動も記録してみることにした

まず、春学期にはオスロ大学のルカこと Luca Tateo 教授が立命館大学総合心理学部の客員教授として半期 14 コマの授業を行った（2 回オンライン、8 回対面、4 回オンラインという形式である)。

ついで、5 月初旬には研究担当副総長として、英国ダーラムで行われた RENKEI（日英大学間連携プログラム）の集い（研究交流）に出席し、時事通信社ロンドン・トップセミナーで講演し、立命館英国校友会でイギリスで活躍する校友の皆さんと歓談した。

5 月中旬には、総合心理学部・人間科学研究科と交流のある海外 4 大学が計画としては別々に来日し、揃って OIC を訪問するということになり、21 日の懇親会に出席した。2024 年の 12 月に立命館大学の研究者を招待してくれたオクラホマ大学・Chie Noyori-Corbett 准教授と旧交を温めた。

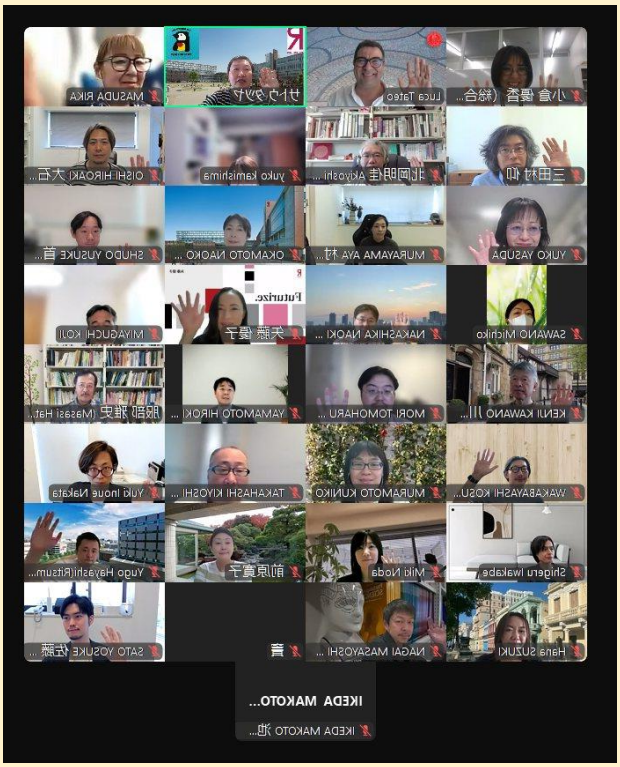
5 月下旬には、大阪万博で英国ナショナルディが開催され、総長に代わって参加した。松山で TEA と質的探究学会が開催された。ルカなど海外からの参加者も多く会は盛会裡に終了した。

そして、8 月 19～22 日は母校・東京都立大学で夏期集中講義（日本語教育学）を行った。東京都立大学は 1991 年 4 月には八王子市（南大沢）に移転したのだが、その時私は助手として、色々と働いていて、その後、3 年間、新しいキャンパスで過ごした。そういう意味では建物自体に懐かしさは感じなかったが、久々でうれしかった。

1　ルカ in 立命館大学

ルカとの付き合いは長い。もう 10 数年くらいになるだろう。昨年、久しぶりに国際対話的自己学会＠エストニアで再会し、日本で講義することをオファーしたところ快く引き受けてくれたのである。

教授会での挨拶は残念ながらオンライン越しとなったが、授業はもちろん、毎週月曜昼に行われている学生達のランチミーティングにも顔をだして学生達と交流してくれた。



2　2025 年 5 月　イギリス訪問

関西国際空港→ドバイ経由でニューキャッスルへ。その後、電車でダーラムに移動。

RENKEI（日英大学間連携プログラム）＠ダーラム大学では、契約更改ということで 5 月 8 日には調印式のようなことをセレモニー的行った。日本からは、東北大学・慶應義塾大学・上智大学・九州大学および立命館大学が参加した。このうち九州大学以外からは副学長が出席した。

RENKEI 日英大学間連携プログラム｜ブリティッシュ・カウンシル
RENKEI the Japan-UK Research and Education Network for Knowledge Economy Initiatives｜British Council

5 月 9 日（金）、ニューキャッスルから特急に 3 時間乗りロンドンへ。

正午から、時事通信社ロンドン・トップセミナーで講演。
https://www.jiji.co.jp/service/jijitopseminar/venue-london.html
このロンドン・トップセミナーは、1977 年（昭和 52 年）に発足して年 9 回の講演を 45 年以上にわたって活動しているそうである。私は大抵のことには動じないが、私の前の会の講演者が黒田東彦・第 31 代日本銀行総裁だと聞いた時はなんとなく気圧された（そう思う必要はないのだが・・）。タイトルは「文化と心理の関係から D&I を考える；多様性から複線性へ」。最後にはワークショップとして北極星的展望ゲームをやって参加者の皆さんのコミュニケーションを促した。

5 月 9 日の夜は、立命館英国校友会に参加。立命館ロンドン事務所の坂本事務員が音頭をとって、校友会を開催し、私が着任したときにサバティカル中の教員の代わりにゼミをもった学生さん（文学部心理学の卒業生）に 20 年ぶりくらいに会いました。英国留学中の国関の M2 も元気にしていました。

1　オクラホマ大学他の皆さんが立命館大学総合心理学部を訪問

OU と RU の交流は長くまた密である。私も昨年、お招きいただいた。歓迎会にはルカもちゃっかり参加。

4 TEA と質的探究学会＠松山　2025 年 5 月 24 日（土）-25 日（日）

TEA と質的探求学会第 4 回大会は、初となる地方大会。松山の人間環境大学松山道後キャンパスで開催された。実行委員長は番田清美さん（人間環境大学総合心理学部）。「旅する TEA～俳句と心理学の街 松山」

特別講演(対面＆オンライン)≪講堂≫ 「TEA をもちいた交差混合研究法デザイン-MM-TEA の可能性」 登壇者：廣瀬眞理子, John W. Creswell

大会記念講演(対面＆オンライン)≪講堂≫
“How to study psychological atmospheres ?” 登壇者 ：Jaan Valsiner(オンライン)

大会特別シンポジウム(対面＆オンライン)≪講堂≫ 「『ホーム』と『居場所』の文化心理学・発達主体による境界形成の探究」 登壇者 ：土元哲平, Marc Antoine Campill, 神崎真美, 小澤伊久美, Luca Tateo,サトウタツヤ

懇親会には、人間環境大学総合心理学部長・佐藤隆夫サンも登場。楽しい一時を過ごしました。

2　ルカのフェアウェルパーティ

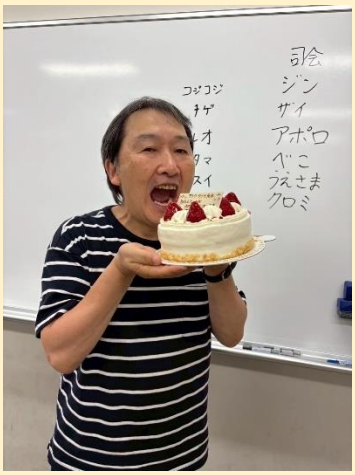
そうこうしているうちに、あっという間にルカが帰国（イタリアなのか、ノルウェーなのか？）。

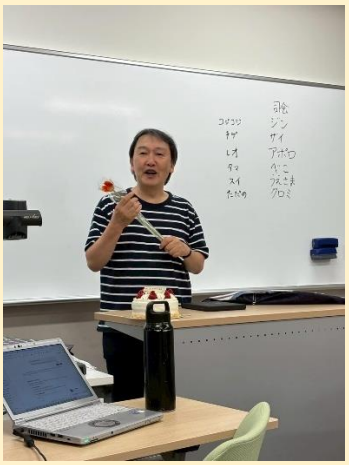
5　誕生日お祝いをいただきました。

ゼミは学士・修士は一体的に、博士はそれと別に行っている。

D 院生の皆さんからは 6／21 のゼミのときに紅白のボーダーネクタイをいただきました。あまりにおめでたい配色でなかなか着用機会に恵まれない。。。

B/M の皆さんからは 7 月 14 日のゼミのときにケーキとボーダーシャツをいただきました。





6　東京都立大学で集中講義

母校である東京都立大学で集中講義をしてきました。日本語教育専攻。サークル棟に行ってみたら、フォークソング研究会が（まだ）あったので、部室を訪問して後輩にあたる部員たちと話をしました。私がいたときと変わらず「名ばかりフォーク研」であることがわかってうれしかった。

ある人の感想より（抜粋）

今回は、記号論的罠が自分の人生と重なる部分があるように感じ、衝撃を受けました。図を左に 90 度回転させることで「行為、記号、実現しなかったこと、目標」が縦に並び、行為から何も進んでいないことが可視化された時、はっとしました。実現しなかったことにこだわり続けるよりも、実現したことからいかに自分の目標に向かって新たに道を切り開いていくかで人生が変わっていくのだなと痛感しました。まずは、「実存を愛す」ところから始めていきたいです。

環世界という概念も大変興味深かったです。人の環世界は育った環境や経験によって変わってくるので、同じものを知覚していても、実際には同じものを享受しているとは限らないのだということが興味深かったです。知識や経験が豊かになれば、自身の環世界も広がっていくのだと思うと、もっといろいろなことを吸収して成長していきたいと思わされました。

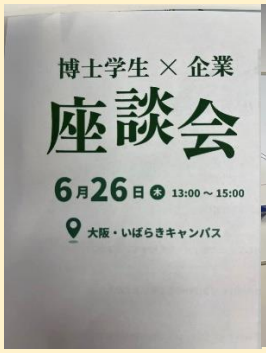
「文化」の対概念が「自然」だということも新たな発見でした。幼い頃、母親に「そんなに自分勝手な行動し

かできないなら山に行って１人で誰にも迷惑かけずに生きてけ」と叱られたことを思い出しました。これは、「文化」の中でうまく他者と共生できないのなら「自然」に帰れ、という意味だったのかなと再認識しました。

最後になりますが、4 日間ありがとうございました。この４日間で TEA についてだけでなく、さまざまなものの捉え方や視点の転換、人生においても役立つ考え方をたくさん教えていただきました。私にとって、この集中講義が自身の研究の促進的記号となりました。本当に受講してよかったです。ありがとうございました。

7　その他

色々やっているうちの一部（説明なし）



8　まとめにかえて

以上、2025 年度春学期（2025 年８月 24 日まで）における文化心理学の仲間達との交流を中心に様々な活動を振り返ってみた。最後に衝撃の一枚。学部の某ゼミ生が、卒業論文に関する発表において、生成 AI に PPT を作らせていたことが発覚！しかし、著者である自分が一見では気づかなかったのが実情であった。

参考文献

佐藤達哉（2007）.『ナラティヴと質的心理学』. 新曜社.
荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）. 複線径路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例. 質的心理学研究, 11, 95-107.
佐藤達哉・賀茂美則（2005）. 複線経路等至性アプローチによる質的研究の方法論的展開. 質的心理学研究. 4. 86-98.

1 つ目の文献を見ても気づかず（本のタイトル名が微妙に違ったが、こんな本出してたよな、、、と自分で納得してしまった)、2 つ目は良く引用される文献で名前順とタイトルが同じだったので雑誌名が違うことに気づけずに見過ごした。最後の論文を見たところで、共著者名が実在しないじゃないか！ということでやっとハルシネーションだと気づいた。生成 AI はありそうな文字列として出していると言われているが、著者だからこそダマされた、的なこともあって、複雑な気持ちになりましたとさ・・・。

参考にこれまで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、８月オランダ、デンマーク

http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf

Jaan Valsiner 先生、2018 年５月の滞在記

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf

ヤーンの古希を言祝ぐ

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf

日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/16.pdf

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (1)；コロナ後の文化心理学ネットワーク、再始動

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol56/11.pdf

帰って来た__対人援助学の縦横無尽 (2)；2024 年度の文化心理学ネットワーク、ちょっとだけその他

https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol60/11.pdf

文献等

TEA と質的探究学会第 4 回大会予稿集

https://jatq.jp/conf/JATQ04/assets/images/0514JATQ4program.pdf?fbclid=IwY2xjawLEpIBleHRuA2FlbQIxMABicmlkETFxM2t6RFoxWTJSVG5VNU5XAR5dFuxTzzeUdqm8qLx96aWB1CYvD9421Ph_G0RQ5Y8GwiVtdC4mNQbirtPT5A_aem_XlVnm-JG9hVOHtXPXOnsNw